＜ ちょっと一息　コーヒーブレイク ＞

Coffee break

NO．１

Ｈ３０．４．２（月）

桶売小学校長　本名　武

子どもの前に立つ、前に・・・

仏様の指・・・教師の誇り

大村はま先生の『教えるということ』の中に「仏様の指」という話があります。

「ある時、一人の男が荷物をいっぱい積んだ荷車を引いて通りかかった。ところが、ぬかるみに荷車がはまってしまい、懸命に引っ張っても抜け出せないでいる。やがて、仏様がちょっと指でその荷車に触れられた。すると、荷車はぬかるみから出ることができた。男は、仏様の力にあずかったことを永遠に知ることはない。自分が努力して抜け出せたという自信と喜びをもって荷車を引いていくのだ。」

教師の仕事も同じように思います。仏様の指にあたるのは、この子をなんとしてもと思う心やねばり強さ、温かな児童理解や学級経営、子どもの姿を思い浮かべての懸命な教材研究、授業力・・・etc。

子どもが自分の力で、頑張ってできたという次につながる意欲・自信をもたせられる、そう仕向けていくことが教師の仕事なのだと思います。

子どもができるようになるために、夜もほとんど寝ずに教材研究をしたり、一人一人に応じた資料を準備したりしていたことは、子どもには永遠にわからない・・・、「自分でできるようになった」それだけでいいのです。**目の前の子どものその前向きな姿や自信こそ、私たち教師のプライドです。**

その姿こそ、してきたことの結果

「何々をしなさい！とキーキー言わずに、いつのまにかそうさせてしまうことこそが教師の仕事。話を聞ける子どもにしたいなら、面白い話をたくさん用意しておくこと。忘れてもらっては困るようなことは、忘れないような話と話し方をすることです。」半世紀以上前に教師だった方が言っています。

できていないことを子どものせいにすることなく、どれだけそのことのために準備・工夫、努力のしたかの大切さを問いかけてくる文章です。**子どもの今の姿は、私たちの指導の結果（鏡）です。**

馬に水を飲ませる

「馬を１人で水辺に連れて行くことはできても、そこで馬に水を飲ませることは１０人かかってもできない」という諺があります。水を飲むかどうかは馬自身の問題です。

同じようなことが、子どたちとの関係にも見られます。「学校のきまりを守る」こと、結果は同じでも、動因として、他者を考える等の内面に根ざした自律的なものか、単に罰則等の他律的なものか、子どもたち自身が一つ一つの意味を考えられる、そして行動・実践できる、・・・道徳教科化の年に、**自律の重みを子どもたちとともに、・・・それも私たちの仕事。**